知的障害児・者の家族のセクシュアリティに関する調査

宮原　春美[1)]・相川　勝代[2)]

要　旨　知的障害養護学校であるK高等養護学校の保護者を対象に，知的障害児・者の家族のセクシュアリティに関する質問紙調査を実施し，セクシュアリティ確立のための課題について検討した．知的障害児の性的発達，性教育についての考え方では，約8割の人が「普通に発達する」「性教育は必要である」と回答しており，保護者は知的障害をもった子どもの性的発達を認め，性教育の必要性も認めていた．しかし，結婚や出産，性行動についての対応，意識には戸惑いがみられ，現実的な性に関する心配事もあげられていた．従って，知的障害児・者の家族に対する認知領域，感情領域，行動領域における支援の必要性が示唆された．

長崎大医療技短大紀 14(1): 61-64, 2001

Key Words　:　知的障害児・者，セクシュアリティ，性的発達，性行動，性教育

はじめに

家族の障害観やセクシュアリティは，障害児・者のセクシュアリティ確立に大きく影響すると考えられる．今回の調査に先立って実施した「長崎県の盲・ろう，養護学校の性教育実施状況に関する調査」[1)] では，児童・生徒に対する教育は学年が進行するにつれて実施されていたが，保護者を対象とした性に関する指導，性に関する講演などは実施しているところが少なく，また保護者の要望と学校の対応にはギャップがみられた．

そこで知的障害児・者の家族のセクシュアリティに関する調査を実施し，その課題について検討した．

研究方法

調査対象は長崎県の知的障害養護学校であるK高等養護学校の保護者95人である．

調査方法は集合法による質問紙調査であり，学校行事に出席した保護者にアンケートの趣旨を説明して質問紙を配布し，後日封をして学校側に提出してもらうように依頼した．質問や相談がある場合は記名を依頼した．

調査内容は保護者が一般的な性や性教育についてどのように考えているか，子どもの性的発達や性行動をどのようにとらえているか，知的障害をもつ子どもの性教育についての考え方，性に関する実際的なトラブルなどについてである．そして，保護者自身の性意識と子どもの性への対応についての関連とその課題を分析した．

調査期間は平成11年5月7日から7月3日である．

結　果

1．対象の背景

回答があったのは61人（回収率64.2%）であった．そのうち相談を希望された保護者が2名あった．保護者の性別，年代を図1に，子どもの性別，学年を図2に示す．

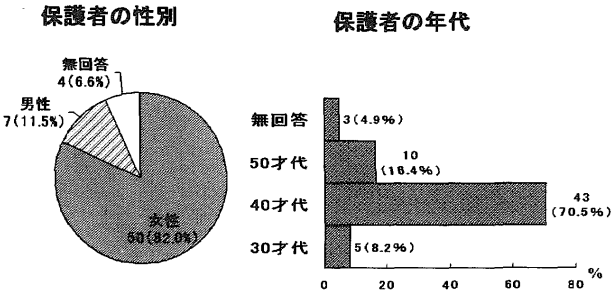

図1　対象者の背景（保護者）

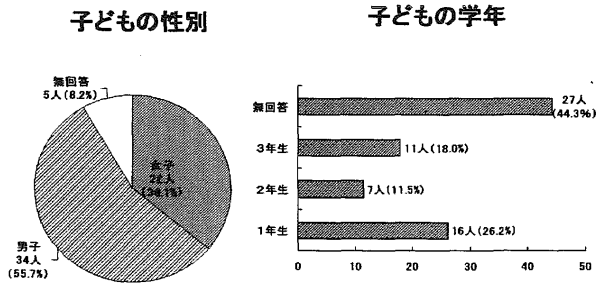

図2　対象者の背景（子ども）

2．保護者からみた子どもの性的発達

保護者からみた子どもの性的発達について，まず男子では変声，性毛，がっしりした身体つきはほぼ90%の保護者が確認できており，髭，精通では学年進行につれ発現が増加していた．精通については，回答者がほとんど母親であったため確認することの困難性があるが，1年生では11%しか発現していなかった（表1）．

女子では乳房の発達，性毛，丸みをおびた身体つき，

1　長崎大学医療技術短期大学部看護学科
2　長崎大学教育学部学校教育講座

腋毛，初経発来がほぼ確認できており，特に月経は全員発来していた（表２）．

異性への関心は42人（68.9%）が示しており，示していないのは３人（4.9%），解らないが14人（23.0%）であり，男女差は認められなかった．

表１　保護者からみた子どもの性的発達（男子）

(%)

	変声	性毛	がっしりした身体つき	ひげ	精通
1年生 N=9	9 (100%)	9 (100%)	7 (77.8%)	5 (55.6%)	1 (11.1%)
2年生 N=7	6 (85.7%)	6 (85.7%)	7 (100%)	5 (71.4%)	5 (71.4%)
3年生 N=5	5 (100%)	5 (100%)	5 (100%)	4 (80%)	4 (80%)
無回答 N=16	14 (87.5%)	16 (100%)	13 (81.6%)	12 (75%)	8 (50%)
計 N=37	34 (91.9%)	36 (97.3%)	32 (86.5%)	26 (70.3%)	18 (48.6%)

表２　保護者からみた子どもの性的発達（女子）

人(%)

	乳房の発達	性毛	丸みをおびた体つき	腋毛	初経発来
1年生 N=7	6 (85.7%)	6 (85.7%)	6 (85.7%)	6 (85.7%)	7 (100%)
3年生 N=6	6 (100%)	6 (100%)	6 (100%)	6 (100%)	6 (100%)
無回答 N=12	12 (100%)	11 (91.7%)	10 (83.3%)	9 (75.0%)	12 (100%)
計 N=25	24 (96.0%)	23 (92.0%)	22 (88.0%)	21 (84.0%)	25 (100%)

３．知的障害児の性的発達についての考え方

知的障害児の性的発達について健常児の発達に比較してどうかを問うたところ，保護者の回答は「遅れる」が７人（11.5%），「普通に発達する」は48人（78.7%），「普通より早い」は２人（3.3%），「個人差が大きい」は１人（1.6%），無回答３人（4.9%）であり，約８割の保護者が性的発達は普通であると考えていた．

４．性教育に対する考え方

一般的な性教育と知的障害児の性教育に対する考え方を表３に示す．

一般的な性教育については，「必要である」が54人（88.5%），「必要でない」が６人（ 9.8%），無回答が１人（1.6%）であった．「必要でない」とした理由は，性は自然に解るものだから，性教育をすることによって寝た子を起こすようなものだからという回答であった．

知的障害児に対する性教育については，「必要である」が46人（75.4%），「必要でない」が７人（11.5%），無回答が 8人（13.1%）であった．「必要でない」とした理由は，性教育をしても理解できないと思う，性教育は受けさせたくないという回答であった．

一般的な性教育，知的障害児に対する性教育ともに，約８割の保護者が「必要である」と答えていた．しかし，知的障害児に対する性教育について，「必要でない」と「無回答」を合わせて25%あり，保護者の戸惑いも推察できた．

表３　性教育に対する考え方

人(%)

	必要である	必要でない	無回答
一般的な性教育	54(88.5%)	6(9.8%)	1(1.6%)
知的障害児に対する性教育	46(75.4%)	7(11.5%)	8(13.1%)

必要でない理由：
＜一般的な性教育＞
・自然にわかる
・寝た子を起こすようなもの
＜知的障害児に対する性教育＞
・理解できない
・教育をうけさせたくない

５．結婚，出産に対する保護者の期待と実現性に対する考え方

子どもの結婚，出産に対する期待と実現性に対する考え方を表４に示す．

まず，結婚への期待では「結婚させたい」が49人（80.3%），「結婚させたくない」が５人（ 8.2%），「わからない」が２人（3.3人）であったのに対して，実現の可能性を問うと「結婚できると思う」が24人（39.3人），「結婚できないと思う」が26人（42.6%），「わからない」が２人（3.3%）となっていた．

出産については，夫婦で子どもを育てていくという意味において男子生徒の保護者も含めて質問した．出産への期待では「出産させたい」が39人（63.9%），「出産させたくない」が13人（21.3%），「わからない」が１人（1.6%）であったのに対し，実現の可能性では「出産できると思う」が26人（43.3%），「出産できないと思う」が23人（38.3%），「わからない」が１人（1.7%）となっていた．

結婚，出産に対する保護者の期待と実現の可能性に対する考えには，大きなギャップが認められた．

表４　結婚，出産に対する保護者の期待と実現性に対する考え方

結婚について　　人(%)

期待		➡ 実現の可能性	
結婚させたい	49(80.3%)	結婚できると思う	24(39.3%)
結婚させたくない	5(8.2%)	結婚できないと思う	26(42.6%)
わからない	2(3.3%)	わからない	2(3.3%)
無回答	5(8.2%)	無回答	9(14.8%)

出産について

期待		➡ 実現の可能性	
出産させたい	39(63.9%)	出産できると思う	26(43.3%)
出産させたくない	13(21.3%)	出産できないと思う	23(38.3%)
わからない	1(1.6%)	わからない	1(1.7%)
無回答	8(13.1%)	無回答	10(16.7%)

６．子どもの性的発達に対する期待と性行動に対する考え方

子どもの性的発達に対する期待では，「普通に発達して欲しい」が53人（86.9%），「発達して欲しくない」が７人（11.5%）であった．

また性行動のコントロールについては，「性行動は学習でコントロール出来る」が38人（62.3%），「性行動はコントロールできにくい」が17人（27.9%）であった．

子どもの性的発達と性行動のコントロールの関連をみると，「性行動は学習でコントロールできる」と考える保護者は「発達して欲しくない」が３人（7.9%）なのに対して，「性行動はコントロールできにくい」と考える保護者は「発達して欲しくない」が４人（23.5%）となっていた（表５）．

以上のことから，知的障害児の保護者は子どもの性的発達に対する葛藤をもっているものと考える．

表５　子どもの性的発達に対する性行動に対する考え方

人(%)

	発達してほしい	発達してほしくない	無回答
学習でコントロールできる N=38	34 (89.5%)	3 (7.9%)	1 (2.6%)
コントロールするのが難しい N=17	13 (76.5%)	4 (23.5%)	0
無回答 N=6	6 (100%)	0	0

７．性に関する保護者の心配事

子どもの性行動に関する心配事やトラブルを調査した（図３）．

過去のトラブル，心配事では「月経の手当」が25.8%（女子のみの割合），「性器いじり」が9.8%，「異性に抱きついた」が8.2%，「ポルノグラフィーへの興味に関するトラブル」が6.6%であった．

現在のトラブル，心配事では「ポルノグラフィーへの興味に関するトラブル」が14.8%，「月経の手当」が14.5%（女子のみの割合），「性器いじり」が11.5%，「異性に抱きついた」が4.9%，「マスターベーションの回数が多い」が4.9%であった．

８．保護者の性意識

保護者の性に関する意識を二肢択一で質問した．表６に示すように保護者のジェンダーについては，伝統的なステレオタイプの性別役割観は認められなかった．しかし，ポルノグラフィーに関しては容認している姿勢が伺われた．このことは子どものポルノグラフィーへの対応とも関連があるのかもしれない．

表６　子どもの性的発達に対する期待と性行動に対する考え方保護者の性意識

人(%)

男女の性別役割意識について	
女は家庭を守り、男は外で働くのが望ましい	19(31.1%)
女も男も区別泣く分担するのが望ましい	37(60.7%)
男女の違いについて	
男女には性格や行動にはっきりした違いがある	13(21.3%)
性格や行動の違いは男女差ではなく個人差である	47(77.0%)
母性意識について	
生まれつき女性に備わっているものである	20(32.8%)
子どもを育てていく上で身に付いていくものである	37(60.7%)
性情報について	*
ﾎﾟﾙﾉｸﾞﾗﾌｨｰや風俗店があるのはやむを得ないことである	31(50.8%)
ﾎﾟﾙﾉｸﾞﾗﾌｨｰや風俗店は女性差別である	19(31.1%)
介護、育児について	
介護、育児は家庭でするのが望ましい	14(23.0%)
介護、育児は家庭だけでなく社会全体でするのが望ましい	42(68.9%)
セクシャル・ハラスメントについて	
取り立てて目くじらたてることでもない	12(19.7%)
性差別であり、あってはならないことである	45(73.8%)

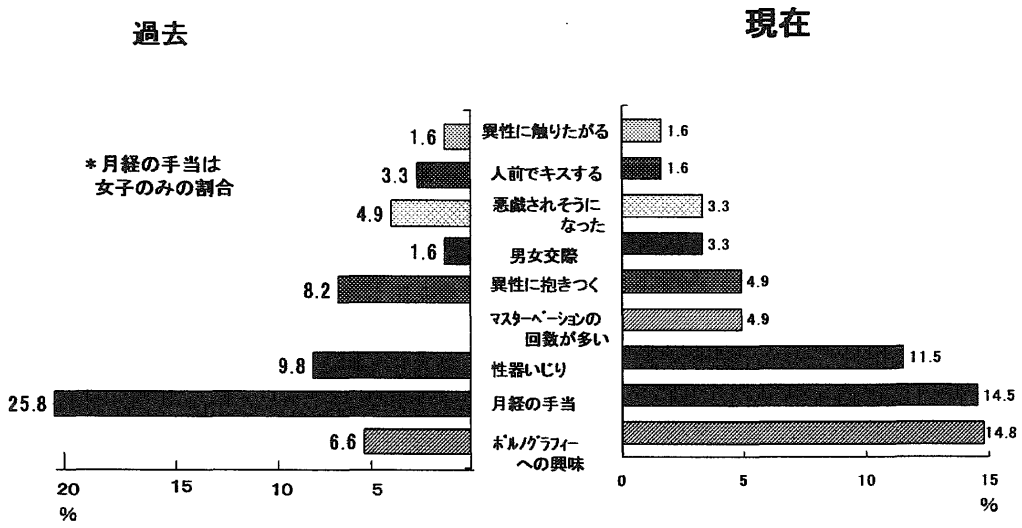

図３　性に関する保護者の心配事

考　察

1999年の「児童・生徒の性」[2] によれば，男子について健常児が高校２年生までに約97％精通を経験しているのに対し，心障学級・養護学級では84％であった．今回の調査は母親の回答ではあるが養護学校高等部２年生で71.4％，３年生で80％に発現しており，健常児に比較すると若干の遅れはあるものの，精通現象はほぼ同じように発現するものと思われる．

また女子の月経発来について，前述の調査によれば健常児の初経発来率は中学３年で96％，高校２年で99％，知的障害児は中学３年で96％であり，養護学校高等部３年生では97％であった．今回の調査では，回答者全員の子どもが初経発来していた．

その他性毛，身体つきの変化なども同様であり，知的障害児も健常児と同様な生理的発達が見られた．

山本ら[3]大井[4]，服部[5]，は知的障害児について，成熟に１，２年の遅れは見られるものの，特殊な例外をのぞけばその性発達は健常児とほとんど変わりがないと述べており，今回の調査でも同様のことが示唆された．

1994年の東京都高等学校保健体育研究会調査によれば，健常児では高校３年生の97％が異性への関心を示していると言われているのに対し，前述の1999年の「児童・生徒の性」[2] の心障学級・養護学校の調査，本調査ともに異性への関心は70％にとどまっていた．性の生理的発達に対して心理的・社会的側面の発達の遅れが推測される．

知的障害児の性的発達，性教育についての考え方では，約８割の人が「普通に発達する」「性教育は必要である」と回答しており，子どもの二次性徴を現実的にとらえているものと思われた．

しかし，具体的に結婚，出産に対する期待と実現の可能性を問うと，結婚や出産をそれぞれ８割，６割以上の保護者がさせてやりたいとしながらも，実現の可能性ではいずれも４割弱に減少し，保護者の現実に対する厳しい認識が伺えた．

さらに，子どもの性的発達と性行動との関連からみると，性行動が学習でコントロールできると考える保護者は我が子の性発達を否定的にとらえる事が少なかったが，性行動はコントロールできにくいと考えている保護者の１／４は我が子の性発達を否定的にとらえていた．このことは山本ら[6]の調査にも見られるが，多くの保護者が知的障害の子どもの男女交際や結婚を望みながら，本人の能力や社会状況を考えて否定的な考え方をもってしまうものと考える．性教育の必要性は認めながらも，現実的には知的障害児・者の性に対する差別や偏見があり，性を援助する社会体制が整っていない現状では，保護者が子どもの性を肯定的に受け止めることは難しく，何らかのサポートが必要と考える．

性に関する保護者の心配事で最も多かったのは，月経の手当に関するものであった．1999年の「児童・生徒の性」[2] の心障学級・養護学校の調査でも同様に，高等部の生徒の14％が指示や介助が必要であったと報告している．月経を肯定的に受け止めることが出来るように教師や保護者が行動モデルを示しながら，個別的に対応する必要がある．また，ポルノグラフィについて，保護者の性意識としては容認する意見が多かったにもかかわらず，心配事として14％あげられていた．マスターベーションや性器いじりと同様にその社会的ルールの理解が難しいため，場所や周囲の状況などへの配慮を含めた具体的な指導が必要と考える．

障害児・者のセクシュアリティ確立には保護者のジェンダー，セクシュアリティが影響をおよぼすと言われているが，今回の調査では伝統的ステレオタイプの性別役割意識は認められなかった．しかし，調査の方法が二肢択一であったため，両極端の回答に対しては回答が得られにくく，実際の意識を十分反映しているとは言い難い面もあった．今後，調査方法の検討が課題として残された．

以上，保護者は知的障害をもった子どもの性的発達を認め，性教育の必要性も認めている．しかし，結婚や出産，性行動についての対応，意識には戸惑いがみられ，現実的な性に関する心配事もあげられていた．従って，知的障害児・者の家族に対する認知領域，感情領域，行動領域における支援の必要性が示唆された．

文　献

1）宮原春美，相川勝代：長崎県の盲・ろう，養護学校の性教育実施状況に関する調査，長崎大学医療技術短期大学部紀要，　13：159-162，1999.

2）東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会編：児童・生徒の性，学校図書，1999，pp92-100.

3）山本良典：性教育の基本的な考え方，発達の遅れと教育，402：6-9，1991.

4）大井清吉，山本良典：知恵遅れの子の性指導，福村出版，東京，11-222，1994.

5）服部祥子編著：障害児と性，日本文化科学社，東京，1996，pp62-66.

6）山本良典，西崎博子：センター利用精神薄弱者の職業生活と保護者の意識，東京都心身障　害者福祉センター研究報告集，22号，1992.